

国内大都市の保育施設における運動遊び環境の現状と課題

The current situation and problem of the outdoor playground environment
in childcare facilities of big cities

児童学科
Dept. of Child Studies

澤田 美砂子
Misako Sawada

住居学科
Dept. of Housing and Architecture

定行 まり子
Mariko Sadayuki

抄 録 本研究では、子どもの運動遊びの充実（十分な環境・時間）に、保育施設の環境がどのように関わっているか、子どもの運動遊びの現状に対する国内大都市の各保育施設による評価との関係から明らかにすることを目的とした。国内大都市の保育施設へ調査用紙を郵送し、園庭の環境に関する項目や、運動を行う時間と環境に対する満足度について尋ねた。分析の結果、様々な固定遊具や移動遊具を設置することのできる広さのある園庭、グラウンド型で土のある園庭のほか、自然のある遊び庭型園庭やウッドデッキ、低年齢児も園庭等にすぐにアクセスできる環境などが、運動遊びを行う環境や時間への満足度を高める要因として求められていることが明らかになった。また、園庭面積が狭い園ほど近隣の公園等を利用していた。こうした現状をふまえ、子どもたちの運動遊びを充実させるための環境づくりについて、各園の状況に応じて柔軟に検討を行うことが必要である。

キーワード：保育施設、運動遊び、環境、園庭

Abstract This study examined the relationship between the environment of childcare facilities and the quality of children's outdoor play in big cities. Questionnaires were sent to childcare facilities in big cities regarding the environment of the playground and childrens' satisfaction. The results indicated that playgrounds with various fixed and moving playground equipment, as well as natural elements, such as soil, nature, wood decks, and a garden that young children could easily accessed was desirable. In addition, it was cleared that the Childcare facility where a garden area was narrow used the parks of the neighborhood. Based on the current situation, it is necessary to expand and improve the playground environment depending on the situation at each childcare facility.

Keywords: Childcare facility, Outdoor play, Environment, Garden

1. 問題と目的

文部科学省は、科学技術の進歩により生活が便利になったことで子どもが体を動かす時間が減少したことに加え、都市化や少子化の問題がいわゆる「三間」の減少を引き起こし、運動遊びをする機会の減少が益々深刻化しているとして、幼児期運動指針を策定した(2012)¹⁾。「幼児が多様な運動を経験できるような機会を保障していく必要がある。」として、保護者や幼稚園、保育所などの保育者に向けて、

幼児期の運動の大切さを示したものであるが、指針通り子どもの運動の機会を確保できているかどうかは、様々な環境の問題とも関連している。筆者らは、2011年3月の東日本大震災により、子どもたちの運動遊び環境に大きく変化のあった被災3県を対象に、保育施設の子どもの体力の現状について調査を行った(澤田ら、2019)²⁾。被災直後と比べ、子どもの運動遊びの環境や体力は全般的に改善されているのではないかと推測できたが、疲れやすさや怪我の多さ、遊び経験の少なさ等の問題は残されており、

またこれらは被災地に限定されるものではなく、引き続き子どもの運動遊びを取り巻く環境について、全国的に調査を行う必要があると述べた。また、細川ら(2019)³⁾は、都市部において、保育所設置に関する規制緩和をきっかけに増えている接地性のないテラス型園庭に着目し、子どもの遊びの様子を観察したところ、従来型の土のある園庭と比較して感覚遊びやみたく遊びなどが少ないことが明らかとなり、子どもが自ら働きかけることのできる環境づくりについて課題を示している。

そこで、子どもの運動遊びに必要な環境に関して様々な問題を抱えている園が多いと考えられる大都市の保育施設において、屋外環境や運動遊びの現状を明らかにするとともに、それらの要因が子どもの運動遊びの充実(十分な環境・時間)とどのように関わっているか、各保育施設による主観的な評価に基づき明らかにすることを本研究の主な目的とする。

2. 方法

2-1. 調査方法

2018年8月に国内大都市の保育所およびこども園(北九州市60園、福岡市79園、広島市67園、大阪市140園、神戸市99園、京都市98園、名古屋市153園、横浜市277園、川崎市114園、東京23区588園、千葉市51園、さいたま市66園、仙台市73園、札幌市92園、計1957園)へ調査用紙を郵送し、保育施設の代表者1名に回答を依頼した。そのうち回収した調査用紙は、北九州市7園、福岡市8園、広島市11園、大阪市13園、神戸市12園、京都市8園、名古屋市25園、横浜市27園、川崎市17園、東京23区55園、千葉市8園、さいたま市6園、仙台市24園、札幌市15園で計236園であり、回収率は12.1%であった。

2-2. 調査内容

園の屋外環境に関する複数の質問項目においては、保育施設敷地内の屋外遊戯場面積、園庭の地面の素材(砂、土、コンクリート、ウッドデッキ、ゴム)、園庭のタイプ(グラウンド型、自然のある遊び庭型)、園庭における大型遊具(固定遊具:すべり台、ブランコ、ジャングルジム、てつぼう、うんてい)の設置状況、園庭に備えてある遊具(移動遊具:

ボール、スクーター・三輪車、フラフープ、なわとび縄、竹馬)、保育室と園庭とのアクセス状況(「保育室と園庭、テラス、バルコニー等は直接つながっており、出入りができる」かどうか回答)等に関して回答を求めた。

園外活動の実施状況に関する質問項目では、実施頻度(毎日、週3回以上、週1~2回、なし)、活動時間の長さ(3時間以上、2時間程度、1時間程度、30分未満)、園外活動の目的(自由記述)等について回答してもらった。

運動遊びの現状を問う質問項目に関しては、体を動かす遊びや運動を行う時間と環境への満足度評価(「子どもたちは、園で体を動かす遊びや運動が十分な時間でできていると思いますか。」「園で子どもたちの体を動かす遊びや運動ができる環境が十分整っていると思いますか。」)について、「そう思う」~「そう思わない」の4件法で回答)、体を動かす遊びや運動の実施時間(一斉での運動指導の時間、自由遊びの時間、その他)、体を動かす遊びや運動を行う環境充実のために望む遊具・設備(自由記述)について回答を求めた。

3. 結果

3-1. 園で運動遊びを行う時間および環境に対する満足度評価に関係する要因について

3-1-1. 園庭面積との関係から

園における運動遊び時間に対する満足度評価、環境に対する満足度評価と、屋外遊戯場(以下園庭)の面積には関係があるかどうかを明らかにするため、相関分析を行った結果、運動遊びの環境に対する満足度評価と園庭の面積との間に有意な正の相関がみられ($p < .01$, $r = .29$)、園庭の面積が広いほど、園において子どもたちが体を動かす遊びや運動ができる環境が十分整っているとの満足度評価が高くなることが示された(表1-1、1-2)。

表1-1. 屋外遊戯場面積、運動遊び時間満足度評価、運動遊び環境満足度評価の平均値および標準偏差

	N	Mean ± SD
屋外遊戯場面積 (㎡)	147	465.44 ± 373.82
運動遊び時間満足度評価	236	3.07 ± .71
運動遊び環境満足度評価	236	2.81 ± .75

表 1-2. 屋外遊戯場面積, 運動遊び時間満足度評価, 運動遊び環境満足度評価の相関係数 (r)

	屋外遊戯場面積 (㎡)	運動遊び時間満足度評価	運動遊び環境満足度評価
屋外遊戯場面積 (㎡)		.124	.292**
運動遊び時間満足度評価	.124		.558**
運動遊び環境満足度評価	.292**	.558**	

3-1-2. 園庭の特徴との関係から

園庭の地面の素材として、砂、土、コンクリート、ウッドデッキ、ゴム、の各素材が使用されているかどうか、また園庭のタイプとして、グラウンド型に分類される園庭を持つか、自然のある遊び庭型に分類される園庭を持つか、それぞれの有無ごとに運動遊び時間および環境に対する満足度評価得点の平均値を算出し (表 2-1~2-4), t 検定を行った。

表 2-1. 園庭における各地面素材使用有無による運動遊び時間満足度評価の平均値および標準偏差

	使用している		使用していない	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
砂	149	3.13 ± .69	87	2.99 ± .74
土	135	3.17 ± .69	101	2.95 ± .72
コンクリート	17	2.76 ± .75	219	3.10 ± .71
ウッドデッキ	44	3.18 ± .72	192	3.04 ± .71
ゴム	26	3.00 ± .73	210	3.08 ± .72

表 2-2. 園庭における各地面素材使用有無による運動遊び環境満足度評価の平均値および標準偏差

	使用している		使用していない	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
砂	149	2.92 ± .70	87	2.63 ± .79
土	135	2.92 ± .71	101	2.67 ± .78
コンクリート	17	2.76 ± .75	219	2.82 ± .75
ウッドデッキ	44	3.02 ± .85	192	2.77 ± .72
ゴム	26	2.62 ± .75	210	2.84 ± .75

表 2-3. 園庭タイプによる運動遊び時間満足度評価の平均値および標準偏差

	あり		なし	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
グラウンド型	123	3.18 ± .67	113	2.96 ± .75
自然のある遊び庭型	49	3.06 ± .69	186	3.07 ± .72

表 2-4. 園庭タイプによる運動遊び環境満足度評価の平均値および標準偏差

	あり		なし	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
グラウンド型	123	2.94 ± .72	87	2.67 ± .76
自然のある遊び庭型	49	3.02 ± .75	186	2.76 ± .74

その結果、園庭の地面の素材として、砂が使われている園は使われていない園に比べて、運動遊び環境に対する満足度評価が有意に高く ($t(234) = 2.89, p < .01$)、園庭の地面の素材として土が使用されている園はそうでない園に比べて、運動遊び時間 ($t(234) = 2.38, p < .05$) と運動遊び環境 ($t(234) = 2.52, p < .05$) のいずれにおいても満足度評価が有意に高いことが明らかになった。さらにウッドデッキが使用されている園については、使用されていない園と比較して、運動遊び環境に対する満足度評価が有意に高い ($t(234) = 2.07, p < .05$) ということが示された。他の素材についてはその素材の有無による時間・環境の満足度評価に有意な差はみられなかった。

園庭タイプに関しては、グラウンド型の園庭を持つ園は、持たない園に比べて、運動遊び時間 ($t(234) = 2.42, p < .05$) と運動遊び環境 ($t(234) = 2.81, p < .01$) のいずれにおいても満足度評価が有意に高いことが明らかになった。また、自然のある遊び庭型の園庭を持つと回答した園は、持たないと回答した園と比較して、運動遊び環境に対する評価が有意に高いことがわかった ($t(233) = 2.20, p < .05$)。

3-1-3. 園庭にある遊具との関係から

園庭にある固定遊具 (ブランコ、すべり台、ジャングルジム、てつぼう、うんてい) および移動遊具 (ボール、スクーター・三輪車、フラフープ、なわとび縄、竹馬) の有無ごとに、運動遊び時間および環境に対する満足度評価得点の平均値を示した (表 3-1, 3-2)。

表 3-1. 園庭遊具の有無による運動遊び時間満足度評価の平均値および標準偏差

	あり		なし	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
ブランコ	43	3.19 ± .66	193	3.05 ± .72
すべり台	155	3.12 ± .67	81	3.00 ± .78
ジャングルジム	77	3.14 ± .76	159	3.04 ± .69
てつぼう	131	3.12 ± .67	105	3.01 ± .77
うんてい	65	3.14 ± .68	171	3.05 ± .73
ボール	170	3.13 ± .68	66	2.92 ± .77
スクーター・三輪車	135	3.15 ± .70	101	2.97 ± .73
フラフープ	124	3.12 ± .74	112	3.02 ± .68
なわとび縄	146	3.13 ± .72	90	2.98 ± .70
竹馬	80	3.21 ± .74	156	3.00 ± .69

表 3-2. 園庭遊具の有無による運動遊び環境満足度評価の平均値および標準偏差

	あり		なし	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
ブランコ	43	3.07 ± .70	193	2.76 ± .75
すべり台	155	2.90 ± .70	81	2.65 ± .81
ジャングルジム	77	2.92 ± .77	159	2.76 ± .73
てつぼう	131	2.95 ± .71	105	2.65 ± .77
うんてい	65	2.97 ± .77	171	2.75 ± .73
ボール	170	2.92 ± .73	66	2.53 ± .73
スクーター・三輪車	135	2.97 ± .70	101	2.60 ± .76
フラフープ	124	2.88 ± .76	112	2.74 ± .73
なわとび縄	146	2.90 ± .74	90	2.67 ± .75
竹馬	80	3.03 ± .76	156	2.71 ± .72

固定遊具に関しては、園庭にブランコが設置されている園はそうでない園と比較して、運動遊びの環境に対する評価が有意に高く ($t(234) = 2.51, p < .05$)、すべり台のある園はない園に比べて環境に対する評価が有意に高い ($t(234) = 2.36, p < .05$) ことが明らかになった。また、てつぼうのある園はない園に比べて環境に対する評価が有意に高い ($t(234) = 3.10, p < .01$) ことが示され、うんていが設置されている園は設置されていない園と比較して、環境に対する評価が有意に高い ($t(234) = 1.98, p < .05$) ことがわかった。ジャングルジムについては、その設置の有無による時間と環境の満足度評価に有意な差は示されなかった。

移動遊具については、ボールのある園はない園に比べて、運動遊びの時間に対する評価 ($t(234) = 1.99, p < .05$) と環境に対する評価 ($t(234) = 3.72,$

$p < .01$) が有意に高く、竹馬を使用できる園はそうでない園と比較すると、運動遊びの時間 ($t(234) = 2.18, p < .05$) と環境 ($t(234) = 3.17, p < .01$) に対する満足度評価が有意に高いことが明らかになった。スクーターや三輪車などの乗り物がある園はそうでない園と比較すると、運動遊び環境に対する満足度評価が有意に高く ($t(234) = 3.83, p < .01$)、なわとび縄のある園はない園と比べて運動遊び環境に対する評価が有意に高い ($t(234) = 2.39, p < .05$) ことがわかった。

3-1-4. 運動遊びを行う時間との関係から

園で子どもたちが体を動かす遊びや運動を行う時間について、主に自由な遊びの時間であると回答した園は、そうでない園と比べて、運動遊び環境に対する満足度評価得点が有意に高いことが示された ($t(234) = 2.33, p < .05$) (表 4-1, 4-2)。一方で、一斉での運動指導の時間であると回答したかどうかによって、運動遊び時間や環境に対する評価の有意な差はみられないことが明らかになった。

表 4-1. 主に運動遊びを行う時間による運動遊び時間満足度評価の平均値および標準偏差

	行う		行わない	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
自由遊び	179	3.10 ± .68	57	3.00 ± .80
一斉指導	116	3.03 ± .67	120	3.11 ± .75

表 4-2. 主に運動遊びを行う時間による運動遊び環境満足度評価の平均値および標準偏差

	行う		行わない	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
自由遊び	179	2.88 ± .71	57	2.61 ± .84
一斉指導	116	2.83 ± .74	120	2.80 ± .76

3-1-5. 保育室から園庭へのアクセスとの関係から

1・2 歳児の保育室と園庭、テラス等が直接つながっており出入りができると回答した園は、そうでない園と比べて、運動遊びの環境に対する評価が有意に高いことが明らかになった ($t(233) = 2.33, p < .05$) (表 5-1, 5-2)。3 歳以上児については、保育室と園庭等が直接つながっているかどうかによって、運動遊び時間や環境に対する評価の有意な差は示されなかった。

表 5-1. 保育室と園庭とのアクセスの良さによる
運動遊び時間満足度評価の平均値および標準偏差

	直接つながっている		直接つながっていない	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
1・2歳児	182	3.15 ± .67	54	2.81 ± .80
3～5歳児	159	3.11 ± .67	77	3.00 ± .80

表 5-2. 保育室と園庭とのアクセスの良さによる
運動遊び環境満足度評価の平均値および標準偏差

	直接つながっている		直接つながっていない	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
1・2歳児	182	2.88 ± .74	54	2.57 ± .74
3～5歳児	159	2.87 ± .74	77	2.70 ± .76

3-2. 園庭の面積と運動遊び環境の充実との関係について

3-2-1. 園庭タイプとの関係から

園庭のタイプによって園庭の面積に違いがあるかどうかについて分析した結果（表 6）、グラウンド型の園庭を持つ場合は、そうでない場合と比較して、園庭面積の値が有意に高いことが示された（ $t(145)=3.55, p<.01$ ）。なお、自然のある遊び庭園型の園庭の有無による園庭面積の違いは明らかになら

なかった。

3-2-2. 園庭にある遊具との関係から

園庭に設置されている固定遊具の有無によって園庭の面積に違いがあるかどうかを明らかにするため、それぞれ園庭面積の平均値を算出し（表 7）、 t 検定を行った。その結果、ブランコ（ $t(145)=8.33, p<.01$ ）、すべり台（ $t(145)=4.22, p<.01$ ）、てつぼう（ $t(145)=5.24, p<.01$ ）、うんてい（ $t(145)=2.90, p<.01$ ）、ジャングルジム（ $t(145)=4.87, p<.01$ ）については、設置されている園は設置されていない園と比べて園庭の面積が有意に広いことが明らかになった。続いて園庭で使用できる移動遊具の有無によって園庭の面積に違いがあるかどうか分析するため、同様に表 7 にそれぞれの平均値を示す。 t 検定の結果、ボールが使用できる園については、そうでない園と比べて園庭面積が有意に広く（ $t(145)=2.30, p<.05$ ）、スクーターや三輪車等の乗り物がある園では、ない園と比較して園庭面積が有意に広い（ $t(145)=2.83, p<.01$ ）ことが示された。フラフープ、なわとび縄、竹馬については、その有無による園庭面積の違いは有意に示されなかった。

表 6. 園庭タイプによる園庭面積（㎡）の平均値および標準偏差

	あり		なし	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
グラウンド型	83	558.04 ± 419.04	64	345.34 ± 263.32
自然のある遊び庭型	33	534.33 ± 496.46	113	446.89 ± 331.22

表 7. 園庭遊具の有無による園庭面積（㎡）の平均値および標準偏差

	あり		なし	
	N	Mean ± SD	N	Mean ± SD
ブランコ	28	902.31 ± 478.56	119	362.64 ± 254.06
すべり台	100	548.81 ± 392.59	47	285.91 ± 251.79
ジャングルジム	54	648.75 ± 436.73	93	358.99 ± 284.08
てつぼう	87	588.94 ± 404.20	60	286.35 ± 229.22
うんてい	41	605.44 ± 459.70	106	411.28 ± 321.22
ボール	112	498.75 ± 392.59	35	358.83 ± 285.50
スクーター・三輪車	82	541.41 ± 343.43	65	369.59 ± 390.87
フラフープ	80	516.20 ± 436.02	67	404.82 ± 273.31
なわとび縄	98	490.28 ± 411.20	49	415.76 ± 282.08
竹馬	52	463.94 ± 417.12	95	466.25 ± 350.20

3-2-3. 園外保育の実施頻度および活動時間との関係から

ほとんどの園において、近隣の公園での園外保育を実施しているとの回答が見られたが、まず活動の実施頻度や活動時間によって園庭の面積に違いがあるかどうかを明らかにするため、それぞれ園庭面積の平均値を示し(表8)、一要因の分散分析を行った。その結果、活動の実施頻度による主効果がみられ($F(2, 100) = 6.42, p < .01$)、多重比較の結果、週1~2回実施する園は、週3回以上実施する園に比べて園庭の面積が有意に広いことが明らかになった($p < .01$)。なお、園外保育を実施する際の活動時間の長さについては、分散分析の結果、有意な主効果はみられず、活動時間の長さによる園庭面積の違いは明らかにならなかった。

また、園外保育の目的に関する自由記述文章のテキストマイニング(ユーザーローカル テキストマイニングツール; <https://textmining.userlocal.jp/>)による分析を行い、出現頻度の高い語を明らかにした。名詞では「自然」「ルール」「交通」「季節」「身体」が、動詞では「触れる」「遊ぶ」「動かす」「歩く」「知る」が出現頻度の上位を占め、動詞と名詞の係り受け解析からは、「自然-触れる」「身体-動かす」「ルール-知る」「季節-感じる」「交通-知る」の関係の出現頻度が高いことが示された。

表8. 園外保育の実施頻度による園庭面積 (㎡)の平均値および標準偏差

	N	Mean ± SD
毎日	8	231.90 ± 174.29
週3回以上	28	267.68 ± 235.73
週1~2回	67	462.93 ± 289.73

3-3. 大都市保育施設が望む運動遊び環境について

体を動かす遊びや運動を行う環境充実のために望む遊具・設備に関する自由記述について、「思い切り走り回れる広い園庭がほしい」「遊具が置けるスペースがあると良い」「ボール遊びができる広さが必要」「園庭が小さく十分に遊びこめない」などの園庭の広さに関わる言及や、「築山のような平らではないスペース」「太鼓橋」「ジャングルジム」「木製のアスレチック」など具体的な遊具や設備の名称を示す記述が多かった。テキストマイニング(ユーザーローカル テキストマイニングツール;

<https://textmining.userlocal.jp/>)の結果、以下のことが明らかになった。「園」「庭」を除いた名詞では、「遊具」「ホール」「遊び」「築山」「スペース」が、動詞については「できる」「思う」「遊べる」「使う」「行なう」、形容詞は「広い」「良い」「狭い」「ほしい」「無い」が、出現頻度の上位であった。名詞と形容詞の係り受け解析に関しては、「庭-狭い」「園-狭い」「園-良い」「遊具-良い」「庭-広い」の順で出現頻度が高かった。一方で、少数ではあるが、「遊具・施設よりも職員の意識を高めることが必要」「担任の保育士が外へ出たがらない」「設備が充実していればということではなく保育士の運動に対しての意識や工夫の問題」など、物的環境ではなく人的環境の充実が課題であると言及した記述も見られた。

4. 考察

本研究では、国内大都市の保育施設における運動遊び環境の現状について、主に園で運動遊びを行う時間と環境に対する満足度評価との関係から明らかにしようとした。全体的に、運動遊びを行う時間に対する満足度評価の平均値のほうが環境に対する満足度評価の平均値よりもその値が高く、運動遊びを行う時間はあるが、十分行える環境が整っていない、との評価がなされている傾向が明らかになったと言える。大都市の保育施設では、子どもの運動遊びのために時間を確保することの大切さは十分認識し準備はしているものの、様々な制限がある中でいかに環境を整えていくかという課題を抱えていることが本研究の結果から示唆された。

園で運動遊びを行う環境が十分整っているかどうかの満足度は、園庭の面積の広さとの関係のほか、園庭の地面が砂、土、ウッドデッキであること、グラウンド型や自然のある遊び庭型の園庭を持つことが関係していた。運動遊びを十分行える環境への満足度を高めるために園庭面積の広さは不可欠であることが明らかになり、さらには広々とした空間のグラウンド型園庭を持つ園、従来型の土の園庭を持つ園において、環境に対する満足度のみならず運動遊びを行う十分な時間に対する満足度が高いことも示された。野中(2019)⁴⁾の研究において、広い園庭を持つ保育所のほうが3歳児の身体活動量が有意に多くなることが報告されているが、思い切り体を動かすことができる広さが必要とされていることが、

本研究の結果からも明らかになったと言える。しかし昨今では従来の土の園庭の代替として階上テラス型園庭を設置する保育所の建設が増えており、こうした保育所では土の園庭と比較して自然環境が作れず遊びの拠点となる場をつくりにくいことが課題として挙げられている(細川ら, 2019)。大都市では十分な園庭の広さを確保できず、従来のような土のある園庭や自然のある園庭を望むものの確保できない園が増えているという現実をふまえると、子どもがじっくりと運動遊びを行うことが可能な環境を充実させるために、テラス型園庭等の環境の工夫について検討する必要があると考える。また、園庭へのウッドデッキの採用については、河邊(2006)⁵⁾が、園庭におけるウッドデッキは、遊びのイメージが付与され、場に意味づけが行われることによって様々な遊びが展開する場所と述べており、こうした素材の導入により子どもたちの運動遊びが活性化され、環境への満足度が高まっているものと考えられる。

園庭にある固定遊具において、ブランコ、すべり台、てつぼう、うんていが園庭に設置されていることが、運動遊びを十分行える環境への満足度の高さに関係することが示された。これらの固定遊具は、日本スポーツ振興センターの2020年9月～10月の調査から、幼保連携型認定こども園・保育所等において設置率が高く、特にすべり台、てつぼうに関しては、大都市の保育施設においても市や町・村と大きな差なく設置率が高いことが明らかになっており(日本スポーツ振興センター, 2021)⁶⁾、大都市の保育施設にとってはこれらの遊具が非常に身近な固定遊具であるという認識から、満足度につながりやすいのではないかと考えられる。

移動遊具に関しては、ボール、竹馬、スクーターや三輪車などの乗り物、なわとび縄がある園において、運動遊び環境に対する満足度が高いことが明らかになった。特にボールと乗り物については、その設置には園庭面積の広さとも関係があり、ある程度の広さの園庭を有していなければ安全かつ効果的にそれらを使用した運動遊びを実施することができないため、十分な広さの園庭を含めた総合的な満足度を高めるものと考えられる。なわとび縄については、複数の人数による大縄遊びを行うにせよ、一人一人が縄跳び遊びを行うにせよ、段差がなくある程度の空間が確保できる場が必要である。色々な運動遊びを安全に行うことができる余裕を持った空

間があることも結びつき、環境に対する満足度の高まりにつながっているのではないかと考える。ボールと竹馬については、環境だけでなく、運動遊びを十分に行える時間に対する満足度を高めることも示されたが、竹馬に関しては伝承遊びに関わる遊具であり、子どもたちに現代の遊びだけでなく、昔ながらの運動遊びを経験させることで様々な遊びに興味を持ってほしいとの思いで導入する園が多いと思われる。子どもたちが多くの運動遊びを経験できる園庭環境やじっくり遊びこめる時間が十分にあると認識しているからこそ実現できると考えられるだろう。

体を動かす遊びや運動の実施時間が主に自由遊びの時間であると回答した保育施設において、運動遊び環境に対する満足度評価が高かった。自由遊びの時間に運動遊びを行う場合、子どもたちが運動遊びを行いたくなるような魅力的な環境、遊具がいつでも安全に使用できる状態にあることが考えられるが、こうした環境が整っていることが結果として満足度を高めるのであろうと推察できる。

保育室から園庭やテラス等へ直接つながっており容易に出入りができることについて、1・2歳児に関しては、直接アクセス可能な園はそうでない園に比べて環境に対する満足度が高いという結果が明らかになった。宮尾・吉田(2021)⁷⁾は、保育園における戸外の自由遊び場面において、1・2歳児が経験している基礎的運動パターンを物的環境との関係から調べたところ、全体的に4・5歳児とほぼ同程度の経験をしていることが明らかになり、子どもの興味を引くような物的環境を構成することが求められると報告している。1・2歳児は運動発達において、基礎的な運動パターンを経験し始める重要な時期であるため、保育室からすぐに運動遊びが可能な園庭等に出られる環境にあることは、遊びの連続性を妨げない点や、子どもの興味をかき立てる環境が保育室から見える点、安全性の確保の点からも、保育施設にとって大変重要であると捉えられているものと推察できる。

また、昨今大都市においては、近隣の公園等で定期的に園外保育を行うことによって、園庭よりも広い場所で子どもたちが体を動かす経験を増やそうとしている保育施設が増えているが、本研究の結果からも、園庭の面積が狭い園は広い園に比べて園外保育の頻度が高いことが明らかになった。ただし、テ

キストマイニング分析の結果からは、園外の公園等での活動の目的は、子どもが体を思い切り動かす場所としての役割に限らず、園庭では味わうことができない自然に触れ季節の移り変わりを感じたり、交通ルールを知る大事な機会として認識し、活動を実施していること示され、これらは園庭の広さに関わらず目的としていることであった。園内という枠にとらわれない保育の必要性があらためて確認されたといえる。

最後に、国内大都市の保育施設における運動遊び環境について、各園の認識および要望等から言及できることをまとめ、今後の課題と展望について述べる。現況としては、子どもたちの運動遊びを行う時間に対する満足度よりも環境に対する満足度のほうが低く、環境をより整えることが求められており、そうすることで子どもたちの運動遊びの充実が図られると認識されている傾向が示されたといえよう。具体的には、様々な固定遊具や移動遊具を設置することのできる広さのある園庭、グラウンド型で土のある園庭のほか、自然のある遊び庭型園庭やウッドデッキ、低年齢児も園庭等にすぐにアクセスできる環境などが満足度を高めることが明らかになった。しかし、自由記述からもわかるように、実際にはこのような環境が整っていない園が一定数存在し、園内の環境だけでは不十分であると認識している園が多く、園庭の面積が狭い園ほど近隣の公園等を利用していることが明らかになった。こうした現状をふまえると、広さのない園庭やテラス型園庭等の限ら

れた環境において、いかにして子どもたちが運動遊びを楽しむことができるか、各園の状況に応じて検討することが必要となるが、その際には、乳幼児期の運動発達の特徴を十分ふまえたうえで、従来の固定遊具や移動遊具など固定観念にとらわれない発想が、園内の枠を超えた場の活用とともに、これから保育者や我々研究者に求められるのではないかと考える。

謝辞

本研究にご理解とご協力をいただきました、保育所・こども園の先生方、関係者の皆様は心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省：幼児期運動指針（2012）
- 2) 澤田美砂子ほか：日本発育発達学会 第17回大会抄録集, 65（2019）
- 3) 細川かおりほか：千葉大学教育学部研究紀要, 67, 191-197（2019）
- 4) 野中壽子：名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 31, 77-84（2019）
- 5) 河邊貴子：保育学研究, 44(2), 139-145（2006）
- 6) 日本スポーツ振興センター：固定遊具の事故防止マニュアル～学校（園）における安全教育・安全管理のポイント～, 49-52（2021）
- 7) 宮尾一宏ほか：発育発達研究, 92, 10-20（2021）